吉川幸次郎著

漱石詩注

岩波新書

640

吉川幸次郎著

漱石詩注

岩波新書

吉川幸次郎

1904年神戸市に生まれる
1926年京都大学文学部卒業
専攻―中国文学
現在―京都大学名誉教授
日本芸術院会員
著書―「新唐詩選続篇」「人間詩話」「続人間詩話」「漢の武帝」(以上4点岩波新書)「杜甫私記」「宋詩概説」「元明詩概説」「元雑劇研究」「中国散文論」「詩と月光」

漱石詩注　　岩波新書(青版) 640

1967年5月20日　第1刷発行©

著者　吉川幸次郎

東京都千代田区神田一ツ橋 2—3
発行者　岩波雄二郎

東京都青梅市根ケ布 385
印刷者　白井倉之助

発行所　東京都千代田区神田一ツ橋2—3　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　精興社印刷・永井製本

序

吉川幸次郎

漢詩は、夏目氏の文学において、相当の比重を占める。おそらくは俳句よりも、より多くの比重を占める。少くともその自覚においては、そうである。

明治の時代、漢詩はなお甚だ多くの作者をもった。江戸時代の漢学が、単に中国人の詩文を受動的に読むのに満足せず、みずから漢語による詩文の制作を、任務の必須の部分としたのの、延長としてである。あるいは量的には、マス・コミの発達に応じて、江戸時代以上の盛況にあるようにさえ見えた。また質的にも、久しく閉ざされていた中国との直接の接触の開始、あるいは西洋文学との接触によって、何ほどかの変化を示そうとした。新聞には、短歌欄、俳句欄とともに、必ず漢詩欄が、一般読者の投稿を迎えた。詩といえば、すなわち漢詩を意味し、日本語の詩は、新体詩と呼ばれて区別された。森槐南、国分青崖、野口寧斎らは、もっとも盛名ある漢詩人として、しばしば多くの門生による結社の中心であり、新聞の漢詩欄の選者であった。

先生の漢詩は、それら職業的な専門の漢詩人とは無縁に、その外に孤立して作られた。その俳句が、結社ホトトギスと関係をもった如くでない。作詩が新聞にのったのは、明治四十三年、

修善寺での吐血ののちの数首を、朝日新聞に連載した小品「思ひ出す事など」の中に、みずからさしはさんだ以外には、絶無であろう。またそのころ朝日の主筆、池辺三山にあてた書簡に、漢詩壇の巨頭国分青崖から書物を借りてほしいむねを、「青崖先生より借用の書籍は日本人又は支那人中にて先生の尤も愛誦せらるゝ詩集一二部拝見致度候」云云とのべているけれども、青崖との交渉は、それ以上に発展しなかったであろう。

先生が漢詩の素人をもってみずから任じたことは、やはり「思ひ出す事など」に、言葉がある。「余は年来俳句に疎くなりまさつた者である。漢詩に至つては、殆んど当初からの門外漢と云つても可い」。

にも拘らず、先生はこの形式によっても、自己を表白することを、愛した。あるいは、欲した。早年、学者としての時期には、「文学論」を中心とする諸論文による表白にともない、後年、創作家としての時期には、小説による表白にともなった。

その発端は、少年期にある。二十歳以前の先生が、いかに漢学を愛好し熱中したかは、いくつかの追憶が語られている。たとえば、明治三十九年、「中央公論」のためにした談話「予の愛読書」、また「文章世界」のためにした談話「余が文学に裨益せし書籍」。もっとも注目すべきこととして、早熟の天才の嗜好と見識は、この世界においても特異であり、当時の一般が名文の模範とした頼山陽の漢文を、「だれてゐて厭味」だとし、人人が軽蔑しがちな荻生徂徠の文章に、傾倒した。事がらは後年の小説「草枕」第八章、和尚と老人との対話にも托されている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ei

「和尚さんは、山陽が嫌ひだから、今日は山陽の幅を懸け替へて置いた」「徂徠もあまり、御好きでないかも知れんが、山陽よりは好からうと思ふて」。

更にまた「思ひ出す事など」第六章に見えた別の追憶は、私ども専門家の目を見はらせるに充分である。写本でしか伝わらないはずの徂徠の著述「蘐園十筆」を、「無暗に写し取る」ため、湯島聖堂の東京書籍館へ、十代の少年が、せっせと通ったというのである。

むろん少年は、漢語による作詩作文にも熱心であり、また得意であった。そのころの作として伝わる漢詩漢文若干篇を、紙幅の関係から、この書物では、収めることができないが、新版の全集第十二巻に見える。

しかし間もなく、漢学を愛好する少年は、漢学を捨てて、英学を治める。英学の学生となったばかりのころ、明治二十二年に書かれた漢文の紀行、「木屑録」の序によれば、「唐宋の数千言を誦し、喜んで文章を作為る」であったのが、「而して時世一変、余・蟹行の書を挾んで郷校に上る」。横文字の学生となったというのである。そうして「復た鳥迹の文を講ずるに暇あらず」。漢字の文学への余暇がうばわれたというのである。しかしその後も、漢語による作詩だけはつづけられて、松山の時代に及び、熊本の時代に及ぶ。この注釈が、大正五年岩波茂雄が刊行した和装本「漱石詩集」の区分にしたがって、第一の部分とする諸作である。明治二十二年二十三歳の少作、「山路観楓」から、三十三年三十四歳、英国留学の途にのぼろうとしての「無題」までである。

英国留学の二年間、帰朝後は大学教師としての四年間、また創作家たることを決意して、朝日新聞に入社してのちも、しばらくは、漢詩がない。再び作りはじめられるのは、修善寺の吐血を契機とする。その事情は、のちに述べる。以後大正五年春に至るまでの作が、和装本「漱石詩集」にしたがって、この注釈が第二とする部分である。

熱心がもっとも高潮に達するのは、「漱石詩集」とこの注釈が、第三とする部分である。すなわち、大正五年の死にさきだつ百日間、小説「明暗」の執筆を午前にすませ、午後の日課として作られた七言律詩の大群である。そのころ芥川竜之介と久米正雄に与えた書簡にいう、「僕は不相変「明暗」を午前中書いてゐます。心持は苦痛、快楽、器械的、此三つをかねてゐます」「毎日百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります」。また両人あての次の書簡にはいう、「僕は俳句といふものに熱心が足りないので時々義務的に作ると、十八世紀以上に出られません。時々午後に七律を一首位づつ作ります。自分では中々面白い、さうして随分得意です。出来た時は嬉しいです」。ここに至って、漢詩に対する態度が、俳句に対するそれと、対比して語られている。且つ態度は、自負をともなっている。おのれの俳句は、十八世紀、つまり蕪村あたりの後塵を拝するのに対し、おのれの漢詩は、二十世紀の詩として位置をもつ、といいたいのである。さきにこの序文のはじめで、漢詩は、俳句よりも、その自覚に占める比重が大きいと、私がいったのは、この表白を拠としてであるが、態度の差違は、早年にもほの見える。正岡子規に与えた書

簡のいくつかは、比重を逆にしたであろう畏友への遠慮をふくめつつ、漢詩の方が俳句よりも、おのれに適した文学形式であることを、うったえるごとくである。本書二八ページ、また五一ページ。

以上のような状況の中で、以上のような経過をもって、また以上のような自負をともないつつ作られた先生の漢詩は、結局において、素人の漢詩という面を、もたないでない。みずからも、「思ひ出す事など」のなかで、「余の如き平仄もよく弁へず、韻脚もうろ覚えにしか覚えてゐないもの」といっている。専門の漢詩人ほどには、中国詩の韻律の法則を記憶しないというのである。この謙遜は、一パアセントほどは、真実である。太平洋戦争中の軍人のごとく、漢詩の韻律法を心得ぬのみならず、そもそも漢語の語法に全然無知であり、ただむやみに漢字を羅列して、日本人の詩はこれでいいとうそぶくような、無神経無作法な人物で、先生はもとよりなかった。全集第十一巻「艇長の遺書と中佐の詩」に見えた海軍中佐広瀬武夫の詩への侮蔑は、より悪い「詩」が、やがて出現すべき事態への予見とおそれとを、蔵しているかも知れない。しかしながら、ごく稀に、平仄の配置のあやまり、韻脚のあやまりが、不注意もしくは誤解の結果として、あらわれないでない。あるいはまた、漢語のごとくにして実は漢語としては成立しにくい熟字の混入、これは専門の漢詩人にもなかなかあることであるが、これまた低い率ではあるけれども、私がこの注釈の五ページで、「この分野の文学においても完全を欲した人が、不注意に犯した不完全さ」というように、ときどきある。

軽卒な誤解を生んではいけない。先生の漢語は、その語法についていえば、きわめて正確である。いわゆる日本漢文、日本漢詩では、断じてない。のちに述べるように、中国人で先生の詩を激賞するものがあるのは、何よりもそれを語る。先生が語学力においても不世出であったことは、その英語が示すごとく、漢語の文学もまたそれを示してあまりある。その正確さは、同時の職業的な漢詩漢文家のあるものよりも、むしろ上にあるとさえ見うける。ただその詩の語彙が、同時の職業的な漢詩人ほどに華麗でないのは、やむを得ぬことであった。また漢詩の成立にほとんど不可欠の要素である典故、classical allusion、その使用も、非専門家の限界をこえない。それらの点で、結局は素人の漢詩であるという要素をもつ。

しかしこの素人の漢詩は、二つの点で、重要である。一つは、いうまでもなく、先生の文学の一部分としてである。単に余技としての遊戯の作を、全然含まないというのではない。大正の初年、しばしば自画の上に題された小詩、すなわち本書第二の部分の後半は、それに傾くものを含むかも知れぬ。しかし他のおおむねは、真剣の作である。大患後の修善寺の詩、最晩年「明暗」執筆中の詩は、ことにそうである。小説で「俗了」された午前の「心持」を、ここで洗うということは、遊戯にふけることではなかった。午後は午後で、別の真剣があった。もし、小説と同等に重視すべしという極端な説があるとするならば、それは一笑に附してよい。しかし小説を完全に読むためには、必ず顧りみらるべき他の部分である。俳句よりも重要な比重を占めるのは、必ずしもその自覚においてのことばかりでない。

第二は、その詩が、日本人の作った漢語の詩として、すぐれることである。もう一歩を進めていうならば、日本人の漢語の詩として、めずらしくすぐれることである。その原因は、思索者の詩である点で、おおむねの日本人の漢詩とことなる、ということにある。

詩は直観の言語である、という定義があるとするならば、恐らくそれは正しい。しかし漢語の詩に関するかぎり、思索を排除した直観のみでは、充実した詩を得難い。事がらはおそらく、漢語の本来もつ性質と、関係している。漢語は、簡潔、ということが、その性質の一つであると普通いわれるように、飛躍の多い直観的な言語で、そもそもある。詩の言語となる漢語は、ことにそうである。ということは、それだけに、簡潔の裏に、あるいは簡潔の前提として、思索の熟慮を蔵しなければ、飛躍は充実した飛躍とならない、ということである。むろん詩としてまず必要なのは、一読して、飛躍の爽快さを感ずることである。しかし再読して、飛躍の前提となった熟慮を追跡し得るものでなければ、よい詩にならない。漢語の詩の本家である中国の詩は、常にこの方向にある。必ずしも大家の詩ばかりではない。そのおおむねがそうである。単に「風雲月露」の美しさを、感覚的にとらえ、咏嘆するだけではいけない。花が散る、日が落ちる、そこに人間の運命なり使命への関心が、反映しなければならない。もしそうでなければ、飛躍と見えるものは、単なる粗笨な豪語、あるいは軽佻浮薄な機智となって、空虚な音声をつらねるにすぎない。

幸か不幸か、日本文学の本来もつ伝統は、こうした漢語の詩の要求する方向と、必ずしも一

致しない。詩はいかなる意味においても思索を忌避する、そうした方向が、日本の詩の伝統として有力である。明治四十一年の講演「創作家の態度」で、先生がした規定を借りれば、「科学的精神」が欠乏し「芸術的精神」がありあまる過去の日本文学は、「情操文学」が過半であり、またその系統のものが優れる。けだし「古今和歌集」は、いわゆる「優れる」ものの代表であろう。しかしこのことは、すぐれた漢語の詩を容易に生み得べき方向ではない。

この矛盾が、古往今来、日本人の漢詩を、ちぐはぐな、面白くないものとして来たと、見うける。「懐風藻」をはじめ、奈良平安朝人の漢詩は、もっともそうである。更にまた江戸時代は、漢詩の最盛期の一つであり、当時の漢詩の作者は、儒者であった。儒者は思索者である。しかし儒者も、詩を作るときは、別の態度に立つ。故にその詩は、依然として面白くない。たとえば徂徠は、もっとも思索者であり、その漢文は、前にふれたように、先生の愛賞にたえた。しかしその漢詩は、面白くない。

もし過去の日本人の漢詩のうち、やや例外となるものを求めれば、足利時代、五山の僧徒の詩であろう。上引の池辺三山あての書簡が、国分青崖から借りてほしい書籍について、更に語をつぎ、「然らずば義堂絶海などの集もし御あきならば拝借願度と存候」といっているのは、興味あることである。義堂周信、絶海中津、ともにいわゆる五山文学の秀才であり、やがて絶海中津の「蕉堅稿」は、先生の愛読書となって、「机上の蕉堅稿」の句を生む。本書一一〇ページ。またもし江戸時代における例外を求めるならば、先生の書法に影響を与えたとおぼしい良寛上

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

人の詩が、その一つかと、思われる。

かく思索者の詩をむしろ例外とする日本の漢詩の歴史は、明治にもちこされた。職業的な漢詩人は、その代表者である森槐南をはじめ、おおむね思索の生活に縁遠かった。あるいは思索の生活をもつものも、おおむねは中国の書を読むにとどまり、あわせて西洋の書を読むことが、思索の必須の条件となった明治の時期において、充分な資格者ではなかった。森鷗外が田口鼎軒を弔った文章の表現を借りれば、「一本足の学者」であり、「二本足の学者」ではなかった。

そうした情勢の中で、あるいは更に強めていえば、そうした歴史の中で、先生の漢詩は、例外的に思索者の詩である。はやく明治三十二年の「無題」に、「眼には識る東西の字、心には抱く古今の憂い」というように、強力な「二本足の学者」であり思索者であることが、その漢語の詩を、甚だ充実したものとした。つまり先生の漢詩は、局部的には職業詩人に比して素人であったけれども、もっとも大きな点では、かえってくろうとであった。前にも触れたように、他の日本人の漢詩には敬意を表せず、ひとり先生の詩に敬意を表する中国人が、一人ならずあるのを、私は知っている。拙著「続人間詩話」(岩波新書)夏目漱石の条参照。むろん中国人の批評が、絶対の基準とはならない。しかし先生の詩の価値、特にその漢語の詩としての価値を、測定する有力な資料である。先生自身が、俳句よりも漢詩を愛重したのも、後者の方が、その思索を托するのに、より適すると感じたことが、有力な原因の一つとして、働いていよう。

ところで甚だ興味あるのは、先生の自覚の中心として働いたものは、必ずしもそうではなかったということである。漢詩愛重の意識の中心、ないしは上層にあるのは、やや別の意識であった。「思ひ出す事など」第五章によれば、俳句とともに、「風流を盛る可き器」としてであった。「西洋の語に殆んど見当らぬ風流と云ふ趣」、それを愛し、それを盛るためであった。

「風流」とは何か。西洋には「見当らぬ」といえば、西洋的な文学とは、対蹠的なものである。少くとも対蹠的な要素をもつものである。そのやや前、明治四十年になされた講演「文芸の哲学的基礎」で、「天地の景物を咏ずる事を好む支那詩人もしくは日本の俳句家」といっているのを、思いあわせれば、人事の葛藤に関心する西洋的な文学、その対蹠として、柔順な自然、柔順なゆえに清潔な自然、それに関心すること、あるいはその中に没入すること、それが「風流」であるように思われる。

それは思索を拒否する態度ではない。自然への没入、それがすでに一つの思索である。しかしその際に貴ばれる思索は、人事の葛藤に関心する際の如き複雑な思索ではない。単純ではなくとも、純一な思索である。

初期第一の部分の詩についていえば、うちもっとも自信ある作は、「草枕」の主人公の作としても現れる五言古詩二首であると仮定するならば、その一つ、「青春二三月、愁いは芳草に随って長し」でおこるものは、「遐懐何処にか寄せん、緬邈たり白雲の郷」とむすばれて、愁いを解消する。本書三四—三五ページ。その又一首、「門を出でて思う所多し」でおこるものは、「逍

遙して物化に随い、悠然として芬菲に対す」と収まっている。本書二九―三〇ページ。それがすなわち「風流」であるごとくである。

以後の何年間かを、学者として、「批評学」の樹立に、身心をすりへらし、「十年間詩を作つた事は殆んどない」であった人が、再び詩を作り出したのは、大患ののち、修善寺での病臥が、久しく忘れていた「風流」を、思い出させたからである。「思ひ出す事など」第四章にはいう、「尤も趣から云へばまことに旧い趣である。何の奇もなく、何の新もないと云つても可い。実際ゴルキーでも、アンドレーフでも、イブセンでもショウでもない。其代り此趣は彼等作家の未だ嘗て知らざる興味に属してゐる。又彼等の決して与からざる境地に存してゐる。」またいう、「余は病に因つて此陳腐な幸福と爛熟な寛裕を得て、初めて洋行から帰つて平凡な米の飯に向つた時の様な心持がした。」第五章にはいう、「病中に得た句と詩は、退屈を紛らすため、閑に強ひられた仕事ではない。実生活の圧迫を逃れたわが心が、本来の自由に跳ね返つて、むつちりとした余裕を得た時、油然と漲ぎり浮かんだ天来の彩紋である。」そうして「斯様に現実界を遠くに見て、杳な心に些の蟠りのない」時間、つまり「風流」に適した時間を得たことが、漢詩ないしは俳句への復帰の原因であるのを、自覚としている。もっともそれは先生の自覚であって、修善寺での漢詩、つまり第二の部分の前半は、すでに必ずしも「風流」のみに終始しない。ただし第二部分後半の題画の詩は、あくまでも「風流」である。「思ひ出す事など」第四章はいう「閑適の境界」を、あくまでも貪ろうとする。

やがて、第三の部分、「明暗」執筆中の午後の日課として、漢詩がえらばれたのも、午前の小説による「俗了」を、午後は「風流」によって医しようとして、はじまったように見える。その第一首のはじめの聯、「幽居正に解す酒中の忙、華髪何んぞ須いん酔郷に住むを」、本書一一四ページが、かりにもし私の注釈が提出する臆測のごとく、小説からの脱却を含意するとするならば、その一首は、「所に随い縁に随いて清興足る、江村の日月老来長し」をもって収まる。

しかしながら、注目すべき現象が、やがて生まれる。「明暗」の午後の詩は、私がその部分の注釈で、よりより指摘するように、小説の執筆が進むとともに、だんだん生ぐさく人間くさくなる。つまり「風流」には終始しなくなる。「戸を閉ざして空しく為る閑適の詩」、本書一三九ページ。やがてそれが、「寒雨打ちて成す流落の詩」となる。一五二ページ。更にはまたそれにつづけて、「天下何んぞ狂える筆を投じて起ち、人間道有り身を挺んでて之く」と、激烈きわまる句を着ける。あるいは風景さえも、「雲は閑葉を黏して雪前に静かに、風は飛花を逐いて雨後に忙し」、と穏順であったのが、本書一四〇ページ、「高翼風に会いて霜雁苦しみ、小心月に吠えて老獒誇る」、と、無気味なことになる。一八〇ページ。はては、室中に毒を仰いで自殺する真人、門外にすき腹をかかえて仇を追う賊子、というような、もっとも複雑な人事が示唆される。一七七ページ。全詩集を通じてもっとも生ぐさい聯である。あるいは日本人の漢詩にはめずらしい油濃い聯である。もはや完全に「風流」ではない。

かくて先生の漢詩は、「風流」の方向へむかっての思索に、だんだん終始しなくなりそうで

あった。しかし小説「明暗」永遠の中断とともに、「眼耳双つながら忘れて身も亦た失い、空中に独り唱う白雲の吟」、本書二〇六ページ、と、逝去の詩讖とはなっても、思索者の詩としては、やや舌足らずの一聯で、筆は、残念にも、擱かれる。

私がこの注釈を書いたのは、もと岩波の新しい全集の漢詩の部分の注釈としてである。執筆の動機は、先生の文学のこの部分が、久しく読まれざる書としてとりのこされ、私にさきだって和田利男氏、松岡譲氏らに、業績があるけれども、なお不充分に感ぜられるのを、惜しんでである。注釈の態度としては、私の他の同種の書とおなじく、訓詁家の本分を守り、著者の心理としてあったものを発掘するのを、職務とした。したがって語の出典をあげる場合も、先生の記憶にあったと思われるものにとどめるのを、原則とする。私は先生の文学の他の部分に、必ずしも通ずるものでない。私の注釈を手がかりとして、より精密な研究が行われることこそ、私の希望である。ことに「明暗」執筆中の詩は、小説の進行と対応させての細密な研究が、小説の批評を専門とする人人によって、可能なように思われる。

なお二つのことを附言しよう。先生の漢詩は立派である。しかしその漢文が、もしずっと書きつづけられていたならば、一そう立派であったであろう。二十三歳の作「木屑録」は、房総旅行の記録であるが、日本人離れのした正確な漢語の措辞と、強烈な描写の意想が、写し難き景を、目前に在るがごとくに、写している。斎藤拙堂の月ヶ瀬遊記が、空論を着けて已むごとくでない。私は世の漢文教科書が、此れを采らずして彼れを采るのを、怪しみたい。このすぐ

れた漢文、おそらくは明治時代の漢文としてもっともすぐれたものの一つを、この書物に収めることができなかったのは、残念である。こんどの全集では、第十二巻に、湯浅廉孫氏の訳文を附して、収められている。

もう一つ、漢詩を愛した先生は、しかし漢詩につき、この注釈の八六ページにも引いたように、「思ひ出す事など」第二十四章で、「漢詩の内容を三分して」、一分を酷愛し、一分を愛せず、のこる一分は判断中止であると、いっている。この言葉は何を意味するか。全体としては、先生が、浅薄な、無批判な、東洋主義者でもなく、東洋趣味者でもなかったことを、示しているが、ただそのいわゆる「三分」の説についての、より詳しい説明は、全集の中から見いだしにくいようである。広瀬中佐の粗笨な豪語が、先生の愛せざるものであったことは、たしかとして、晩年の先生は、明清の詩にも、ある興味をよせた。清の沈徳潜の「国朝六家詩鈔」が、早く「思ひ出す事など」第六章にあらわれ、小説「明暗」第七十九章では、おなじく沈徳潜の「明詩別裁」を、京都のお延の父が、津田の父から借りていたのを返し、代りに新しく「呉梅村詩」を借りにゆく使者に、彼の女が立ったのが、二人が顔を合わせるさいしょである。明治四十五年橋口貢あての書簡では、清人の詩はその書と共に「気格頗る下る」というが、大正五年岩波茂雄あての書簡では、これも沈徳潜の「清詩別裁」を、買って届けてほしいといっている。明治の職業的漢詩人のあるものが、清朝の詩の軽佻浮薄な部分のみをまねるのが、愛せざる「一分」の中に含まれているかも知れない。

〔昭和四十二年四月〕

试读结束：需要全本请在线购买： www.er